

腹腔鏡補助下内視鏡的粘膜下層切開剥離術を行った Gastrointestinal stromal tumor (GIST) の一例

大阪府立成人病センター 消化管内科, 消化器外科, 病理診断科

上堂文也 宮代 勲 竹内洋司 石原 立 東野晃治 飯石浩康 矢野雅彦 富田裕彦

【症例】40歳台女性。心窩部痛、嘔気を主訴に近医受診、上部消化管内視鏡検査で穹隆部大弯に25mm大の内腔発育型粘膜下腫瘍を認め当院紹介となった。超音波内視鏡（EUS）では基部が第4層に連続した、境界明瞭で内部不均一な低エコー腫瘍として描出された。EUS下穿刺生検のHE染色で渦巻状構造を呈して増殖する異型紡錘形細胞を認め、免疫染色でCD34, c-kit陽性を示し、Gastrointestinal stromal tumor (GIST)と診断した。胸腹部CT上、リンパ節の腫大は認めなかった。本治療法について同意を得た後、全身麻酔下に腹腔鏡補助下内視鏡的粘膜下層切開剥離術を行った。まず内視鏡下に腫瘍周囲の粘膜を切開し、粘膜下層を可及的に剥離し基部を露出させた。続いて筋層を全周性に全層切開を行った。その後、腹腔鏡を用い腹腔側から病変を摘出した後、筋層切開で生じた穿孔部を腹腔鏡下に連続縫合し終了した。治療時間は2時間58分、出血量は少量であった。摘出検体の断面像は粘膜下の境界明瞭な28×18mm大の白色充実性病変で、病理組織診断はGIST, low risk grade (3/50HPF), margin negativeであった。術後合併症はなく、術後第8病日に軽快退院となった。